知床岬 2005

1956年に植物学者の舘脇操が「知床半島の植生」を出版した。これが最初の詳細な記録であって、それ以前には知床の植物については断片的に知られるのみだった。ちょうど半世紀ほど前のことである。

それでもシレトコスミレは「知床半島の植生」に先立つこと20年以上前に新種として発見・命名されていたし、しかもそのスミレの標本を採集したのはドイツ人だった。このことからも知床がそれほど未踏の地であったわけでもないことがわかる。

以後も数多くの植物研究者が知床を訪ねているのだが、1991年になってなおラウススゲが日本新産種として発見されている。いまだに「秘境」と言われても仕方ない部分もあるということだ。

そのわれらが秘境が7月に世界自然遺産へと登録された。そのため今年は現状把握のためと称して知床の奥地へと植物調査に入る機会を得た。あちらも、こちらも、と続けていく内に知床以外の調査には手が回らず、今年はとうとう夏の斜里岳に山頂まで登らずじまいとなった。まあ非常事態といえよう。

印象深かったのは羅臼側とウトロ側の両方から１回ずつ、海岸線を歩いて岬にむかった調査だ。両方ともに歩きはじめで蛇に出会った。羅臼側ではシマヘビ、ウトロ側ではマムシにそれぞれ遭遇した。どちらも調査に同行した人が捕獲し、記念撮影をしている。シマヘビの方は指を噛まれて血をだらだら流していたし、マムシの方はしっぽをつかんで手からぶらんと下げた状態でマムシかどうか検討し始めるという始末だった。

シマヘビを捕獲して喜ぶ長谷部氏

羅臼側は２人乗りカヌー２艇のサポートがついた。調査日程は３日。当日になるまで知らなかったがカヌーというものにはずいぶんと荷物を積むことができるらしく、かなり軽い装備で歩くことができた。といっても結局のところ調査班は陸路をとぼとぼと歩くしかない。こちらの遅々たる歩みにヒマをもてあましたカヌー隊は海上を行ったり来たりしている。

羅臼海岸

カヌー隊のサポートは徒歩隊を先回り先回りしてくれ、食事の用意など整えて待ってくれている。１日目は途中の湾で一泊したが、歩いて着いたときにはすでにテントとタープが設営されていた。単独調査が多い私にとっては、なにか間違ったところに来てしまったような気分だが、とにかくありがたい話であった。

２日目は潮の加減で歩いて通行できない場所があり、待望のカヌーに乗船することができた。ちなみに私は完全に内陸の育ちで、海や船はいまだにもの珍しい。もちろん泳ぎは相当に不自由である。

生まれて初めて乗ったカヌーはまさに木の葉のように波に上下して私をあわてさせた。パドルをもつ手が固まり動かなくなったのを見て、後部座席のサポート隊長が笑い声をあげる。揺れにある程度なれて落ち着いた頃にはすでに次の調査をする湾に上陸しなければならなかった。

岬に至るまでは途中にたくさんの昆布番屋がある。平らに転圧した石浜（「カンバ」というらしい）には、黒々としたオニコンブがびっしりと干されている。羅臼昆布を実際に干す風景にでくわすのはこれが初めてだった。夏休みシーズンだったためか、子供も手伝って番屋にいる姿もよく見かけた。たいてい犬も元気よく吠えている。

２日目の昼ごろから風がつきだした。台風が接近しているのだ。カヌーは早めに岬を越えたいという。岬では普段からその周辺の海よりも波が高いらしい。すでに作ってくれていたスパゲッティペペロンツィーノを大量のロイヤルミルクティーで流し込みながらそんな話をきいた。歩く分には適度な風に青い空、白い雲で気分は悪くない。昼飯を終えるとサポート隊は調査班を残して視界から消えていった。（つづく）　　（内田暁友）

発行　斜里町立知床博物館協力会

099-4113　北海道斜里郡斜里町本町49　斜里町立知床博物館内

TEL:01522-3-1256/FAX: 3-1257　　http://www5.ocn.ne.jp/~museumsp/